

九州の西側は私たちが守る

長崎税関は、九州西側の複数の県を管轄し、管轄区域は南北に直線距離で約1,000kmと長く、多くの離島(約1,200)及び不開港(約700)を有しています。管轄内には本関のほか、支署(4)、出張所(10)、監視署(2)の合計16官署を設置し広い管轄区域をカバーしています。

長崎税関は、過去に不正薬物の摘発のあった中国大陸や東南アジアに地理的に近いことから、不正薬物等の洋上取引事案も発生しています。このことから長崎税関では洋上での密輸取締りも重要な対策の一つとして取り組んでいます。

近年は、LCCを中心とした航空路線の増加・国際クルーズ船の入港の増加が特徴としてあげられ、このような空港・海港においても密輸取締りを行っています。



1 本関庁舎(昭和3年) 2 監視艇なんせい 3 出島図(長崎歴史文化博物館蔵) 4 オランダ坂に建つ湊会所跡の石碑 5 長崎歴史文化博物館前に建つ長崎会所跡の石碑
6 梅崎庁舎(長崎大学附属図書館蔵) 7 寛永長崎港図(長崎歴史文化博物館蔵) 8 年末特別警戒の出陣式 9 大浦海岸通りに建つ運上所跡の石碑 10 本関庁舎(現在)

長崎港と長崎税関の歴史

長崎港は、ポルトガル船が入港した室町時代の元亀2(1571)年に開港し、令和3(2021)年に開港450年を迎えました。鎖国時代には出島を中心に外国との貿易で栄え、日本の玄関口として外国の産業・文化の受け入れに重要な役割を果たしてきました。明治時代には上海航路などの連絡船が寄港する歴史のある貿易港として発展してきました。

明治以降の長崎港は、昭和33(1958)年にカロナア号がクルーズ客船として初入港して以降、多数のクルーズ船が寄港する日本有数の国際観光港です。近年、東アジアにおけるクルーズ船需要の拡大に伴い長崎港への寄港が急増しています。

長崎税関の歴史は、外国貿易を総括する機関として「長崎会所」(長崎税関の前身)が設置された元禄11(1698)年から始まります。その後、安政の開国に伴い、安政6(1859)年に長崎会所の一部に湊会所が設置され、文久3(1863)年に長崎運上所と改称されました。そして明治5年11月(1872年)、運上所は税関へと改称されました。

第二次世界大戦により、外国貿易が中断されると、税関は一時海運局に併合されました。昭和21(1946)年の税関再開時には、長崎は門司税関の支署として出発しました。その後、長大な海岸線をもつ九州において増加していた密輸の取締りを徹底するとともに、急増が見込まれた東アジアとの貿易に対応する必要があったことから、昭和28年(1953)年に門司税関から独立し、長崎税関として再始動することとなりました。

このように長崎港の歴史は、約450年前のポルトガル船の入港から現代まで続いており、鎖国時代から行われてきた貿易に係る輸出入手続、取締り、税の徴収等の業務についても今日の税関へと脈々と受け継がれてきました。

また明治時代に建てられ、現存している税関庁舎は全国で5か所あり、「税関ゆかりの地」と呼んでいます。この歴史的な資産のうち、3か所が長崎税関管内にあり、旧長崎税関下り松派出所(長崎県長崎市)、旧長崎税関口之津税関支署(長崎県南島原市)、旧長崎税関三池税関支署(福岡県大牟田市)が現存しており、見学することができます。(⇒P.134、P.136)

洋上取引による摘発実績

長崎税関では、これまで他税関や関係機関と協力して、洋上での大量の不正薬物等の密輸入を摘発してきました。主な摘発実績は以下のとおりです。

- ▶▶ 平成11(1999)年 鹿児島県南さつま市(黒瀬海岸)における覚醒剤密輸入事件(約565kg)
- ▶▶ 平成28(2016)年 鹿児島県徳之島における覚醒剤密輸入事件(約100kg)
- ▶▶ 平成29(2017)年 佐賀県唐津市における金地金密輸入事件(約206kg)
- ▶▶ 令和元(2019)年 熊本県天草市における覚醒剤密輸入事件(約587kg)

長崎税関管轄



長崎税関の管轄

長崎税関の管轄区域は、長崎県(壱岐・対馬を除く全域)、福岡及び佐賀の両県のうち、有明海に近接する地域(久留米市、大牟田市、佐賀市等)、熊本県並びに鹿児島県の広範囲に及んでおり、管内には外国貿易のために開かれた15の開港と4つの税関空港を有しています。管轄が南北に長く、北は長崎県から南は与論島(鹿児島県)までの直線距離は約1,000kmに及び、長い海岸線と多くの離島・不開港を有しています。

(令和4(2022)年12月現在)